羅雪谷と胡鉄梅

――来舶画人研究――

鶴田武良

時代が明治と革まってからも、十五年にわたった太平天国の動乱の余燼の残る中国から、華人賓遇の伝統の厚いわが国に平穏とたずきを求めてやってくる画人が少なくなかった。江戸時代の来舶画人が大半は船主乃至貿易商人であって、中国の画史に名を留める者が言はば例外であるのにくらべ、明治初期に渡来した画人は、許子野のようにただ日本での行跡が僅かに知られるだけの者もあるが、ほとんどが母国に画名を遺している。例えばここに紹介する羅雪谷と胡鉄梅もそうである。

羅雪谷について最も早い記事は、恐らく編者李玉棻の自序に光緒二十年（一八九四）の年記のある「甌鉢羅室書画過目攷」(1)巻四の羅清伝であろう。李玉棻は自身の見聞をもとに

羅清、字雪谷、広東番禺人、性孤潔、棄レ家遊歴、工二指法一、王丹林処士蔵有墨竹屏四幀、雨染煙烘、発二秀潤於指間一、雷樹軒処士蔵有紅梅大横幅、有二古豔古香之勢一、又見有二万竿煙雨大幀一。

と伝える。少しく後になるが、編者汪兆鏞の民国十六年（一九二七）の序を持つ「嶺南画徵略」(2)巻十には「留庵随筆」を引いて、ただ、

羅清、字雪谷、番禺人、善二指画蘭竹一。

と記すのみであるが、同書の「校記」(3)には、

嘗游二京師一、克勤郡王称為二奇士一、香山梁碧珊贈以レ詩、有下侯門竹閣称二奇士一、及十指槎枒煙景闊之句上。

と、北京客遊についてふれる。民国十八年（一九二九）の編者呉心穀の自序を持つ「歴代画史彙伝補編」(4)巻二は「甌鉢羅室書画過目攷」の記事を少しく略して引き、その終りに「亦、山水を善くす」と補うだけであるが、近人俞剣華は「韜養斎筆記」「留庵随筆」などを引いてやや詳しく、次のように記している。(5)

羅清、字雪谷、番禺（今広州）人。喜蓄二猫犬一、与同二眠食一、愛レ之如二妻子一。同治中棄レ家遊二日本一。工二指頭画一、作画時於二指甲中一蔵二棉花少許一、故其指墨無レ異二筆画一、所レ作蘭竹、雨染烟烘、頗得二秀潤之致一。梅石亦有二古香古豔之妙一。筆画山水、尤擅二勝場一、運筆用墨、得二奚岡空霊静逸之趣一。

右に挙げた記事から、羅雪谷は名を清といい、雪谷は字、広東省番禺県（今、広州市）の人、家を出て各地を歴遊、その間に北京に遊び貴人と交わり、同治年間（一八六二―七四）日本に客遊したこと、指頭画を工み

にして、蘭竹、梅石にすぐれたこと、その指画は指甲（つめ）の間に綿を少し入れて画くもので、筆でかいた画と変らなかったこと、また筆を用いた山水画にもすぐれたことなどが知られる。しかし、生卒年については、いずれもふれるところがなく、全く手懸りを持たない。

ところで羅雪谷の日本客遊については、ただ兪剣華が「同治中（一八六二―七四）、家を棄てて日本に遊ぶ」と記すだけであるが、現存する作品の款記からその時期をほゞ推定することができる。今、年記を持つ作品を年代順に並べると次のようになる。

1修竹図　絹本墨画　橋本太乙コレクション
時庚午（一八七〇）偶画於申江客次　為道之仁兄大雅属　嶺南羅清指作

2巌竹富貴図　絹本墨画
辛未（一八七一）冬月大清羅雪谷指頭作

3蘭竹図
時壬申（一八七二）春二月写於浅草寺内山□之東軒　大清羅雪谷指頭作

4山水図　富士美術館「近代中国の書と画」所載
時壬申秋日偶写并題□句於浅草寺裏之万花深処　大清羅雪谷指頭作

5山水図　紙本墨画　常盤山文庫
時乙亥（一八七五）秋八月作於東京水雲客舎　為梅里先生大雅属　大清羅雪谷指頭絵

6蘭竹石図（図版Ⅷ）　紙本墨画
時大清光緒元年乙亥（一八七五）秋九月画於浅草寺花園小窓

7瓶菊図　絹本墨画　「広東歴代名家絵画」[6]所載
時丁丑（一八七七）夏日偶画於閑雲軒為湘浦大兄大人属　中外散人雪谷弟羅清指頭作

「辛未（一八七一、明治四年）冬月（十一月）」の年記を持つ巌竹富貴図は款に「大清羅雪谷」とあることから、日本での制作と見て間違いない。その前年、「庚午（一八七〇）」の年記を持つ修竹図は申江（上海）で画いたものであるから、日本来航は明治三年から明治四年秋までのこととなる。また「丁丑（一八七七）夏日、湘浦大兄の為に画いた」瓶菊図は、その款記の書き方から中国での制作と考えられる。その二年前、「乙亥（一八七五、明治八年）九月」には東京に居たことが蘭竹石図によって明らかであり、また東京都編纂の「都市（史）紀要」第四の付表A「自明治四年至明治九年末、居留地外居住外人表」によると、羅雪谷は明治八年十月から、職業を書画伝習と届出て、雇主浅草元浅草寺境内森田六三郎方に寄寓している（さねとう　けいしゅう著近代日中交渉史話、一九七三年春秋社刊）から、帰国は明治九年秋から同十年夏までの間、恐らくは明治九年末以降のことと推測される。とすると、日本客遊は明治三、四年から九年ごろまでの六、七年間となる。

羅雪谷の日本での交遊、行跡については、「毅堂丙集」[7]巻五所収の羅雪谷に贈った七言絶句によって鷲津毅堂（一八二五―八二）と、「桂林荘叢書」[8]によって大河内輝声（一八四八―八二）と、蘭竹石図（図版Ⅷ）によって松本良順（一八三二―一九〇七）と、それぞれ交遊があったこと、また先に挙げた款記によって、主に東京にあったことが知られる以外、多くは分らない。しかし、右の三人との交遊から推して、東京在住の名士や漢学者などから知遇を得ていたであろうと推測される。

現存する羅雪谷の作品は日本客遊がたずきのためであったと考えられるわりに少い。筆者経眼のものは、画史が「指頭画を工みにす」と記す通りすべて指頭画である。その指頭画は「清稗類鈔」[9]芸術類七十一「羅雪谷指画」の項に

羊城羅雪谷能作二指画一、惟作画時、須於二指甲中一蔵二棉花少許一。

とあるように、指甲（つめ）の間に綿を少し入れ、そこに墨を含ませて画き、題款の文字も同じようにして書くもので、それがゆびだけで画く指頭画とはかなり趣きのちがう効果を生みだしている。彼の作品には、例えば竹図（挿図1）に見るように、嶺南臭ともいうべき、一種の土臭さを持つものが多いが、この蘭竹石図にはそのような臭味がなく、むしろ清淡であり、竹の葉の遠近をかき分けた墨の濃淡の巧みな使い方といい、指法は極めて繊細で工みである。題材は石と竹と蘭というごく平凡なものであるが、石の背後に竹と蘭とを置いて、三つの均衡を保たせた経営はすぐれている。羅雪谷の代表作とみてよい作柄である。賛は

玉指間参玉版禅　素心聊訂画因縁
三生有幸□同隠　君子清偕王者辺
時大清光緒元年乙亥秋九月
画於浅草寺花園小窓為
蘭疇先生大雅之属并乞正之
羅浮山梅花村散人羅雪谷指頭戯墨
白文「羅浮山梅花邨羅雪谷指頭画」朱文「水雲浮客」

関防は「雲水林居人」（朱文）、間章は「羅浮梅花道人雪谷指頭書画」（白文）。

蘭疇は幕末から明治の西洋医学者で、幕府の医学所頭取から、明治六年初代陸軍軍医総監となった松本良順の号。

なお、手元の資料から先に挙げた以外の羅雪谷作品を掲げておく。

1 墨蘭図　「大清羅雪谷指頭作」　青谷家蔵
2 四君子図　「中華羅雪谷指作」　大阪市立美術館蔵
3 竹図　（挿図1）　橋本太乙コレクション
4 清人羅雪谷指頭画　集古会六十三回例会
5 梅図　「大河内文書」

胡鉄梅については、宣統三年（一九一一）までの上海の書画家について記した「海上墨林」[10]巻三の胡寅伝の附に

胡寅、字覚之、桐城人、（略）子璋、字鉄梅、工山水及写意人物、久寓滬上、旋遊東瀛、画名甚噪。

とあるのが、恐らく最も早い記事であろう。しかし、民国十八年（一九

挿図1　羅雪谷筆　竹図
東京　橋本太乙コレクション

二九）の編者呉心穀序を持つ「歴代画史彙伝補編」巻一は、別に一項を立て、胡寅伝よりもやや詳しく、

胡璋、字鉄梅、寅子、山水多用二渇筆一、古勁沈着、有二荒寒気一、蓋欲三自闢二一径一者、又工二写意人物一、久寓二滬上一、旅二游東瀛一、画名甚噪。

と、その山水画の特色についても言及している。また、「中文大辞典」[11]も胡鉄梅の項を立てて、

胡鉄梅、清、安徽桐城人、寅子、名璋、鉄梅其字也、号堯城子、又号枚期生、（略―歴代画史彙伝補編の引用）、光緒二十五年客二死日本一。

と、卒年、号を記している。古賀十二郎氏も「又号杖期生」と記されているが、杖期は夫が妻のために喪に服すことであり、胡鉄梅が杖期生と署したのは、夫人を失ってからのことと考えられるから、それを別号とみることには疑問がある。これらの記事から、胡鉄梅は安徽省桐城の人、名を璋といい、鉄梅は字、堯城子と号し、山水及び写意人物をよくし、上海流寓ののち、日本に客遊、画名を知られたことなどが分る。その生卒年について「中国美術家人名辞典」は「一八四八（道光二十八年）―一八九九（光緒二十五年）」とし、「宋元明清書画家年表」[12]も「碑伝集補」巻九を引いて、道光二十八年生、光緒二十五年卒とする。しかし「碑伝集補」にはそのような記事は見当らず、今、その拠るところは明らかでないが、古賀氏の「得年五十二」とも合うから信頼してよかろう。

日本客遊については、「海上墨林」「歴代画史彙伝補編」ともに、ただ「東瀛に旅遊」した、と記すだけであるが、「清稗類鈔」芸術類七十一の「胡鉄梅鬻画於日本」の項は少しく具体的に伝えている。

皖人胡鉄梅、名璋、工レ画、挾レ芸遊二上海一、獲レ貲頗豊、旋因経二営蘇報及古香室賤扇店一、尽罄二其貲一、乃挈二所レ娶日婦一東渡、仍以鬻レ画自給、日人慕二其名一、求レ画者輻輳、歿後為二営一小塚一、樹二碣於旁一、曰清国老画師某某之墓。

しかし、ここでも日本来航の時期についてはふれないが、古賀十二郎氏稿本「長崎画史彙伝」[13]にはさらに具体的に

明治十一年（原註・十二年なるべし、脩竹楼座右日記、明治十二年七月十八日の条参照。）の頃、日本に渡来し、名古屋に在留すること数年、再び帰国の後、再渡し、帰国の後、上海にて蘇報と云う新聞を発行し、進取の説を唱えていたが、康有為の乱にあたり、清国政府の嫌疑をうけ、日本に亡命して、神戸に隠れていたが、明治三十二年逝く。得年五十二。長崎に於ては、伊藤八百叟などは、胡鉄梅に画法を問い、大に得る所ありしと云う。

と、明治十二年来航とする。同稿本は枠外に岡田篁所の「脩竹楼座右日記」[14]明治十二年七月十八日条を引き、

王（王鶴笙）曰、胡鉄梅在八月中到二長崎一、此名画手、余聞二其名一、未レ見二其人一、鉄梅之来也、将介二先生一謁見請レ益、弟此月底ニ□到二神戸一、鉄梅来、仮寓在泰記、先生其看問唐杏史可也。

と、その日、篁所が王鶴笙から、胡鉄梅が八月中に長崎に来ると聞いたことを伝え、さらに同日記は八月十七日に終るが、その間には胡鉄梅来崎の記事がないことを註記している。南画家長尾無墨（?―一八九四）は、この前年、明治十一年四月、上海に渡り、帰国後、旅中に得た詩を「滬遊雑詩」二巻に編んだ。同書は王治梅、胡公寿、張子祥などとの交遊の跡を留めているが、中に胡鉄梅との交友を伝える七言絶句一首[15]があるから、日本来航は岡田篁所の云うように、明治十二年八月半ば以後、恐らくは八月末に近いころであったであろう。

胡鉄梅の日本滞在は、本稿末に掲げる作品の年記によると、断続はあるが、明治十三年（一八八〇）から同十九年（一八八六）までを確認するこ

とができ、その間、足跡は名古屋（明治十三年）から京都、大阪（明治十五年）、山陰（松江、明治十九年）に及んでいる。また、明治十六年五月十七日には、新潟県中蒲原郡五泉町に滞在していたことが、川口鬻の「巡越余録」[16]に見えるから、越後路から北陸にかけても売画をして歩いたものであろう。後に引くが、永井久一郎（号禾原）は胡鉄梅との交遊を伝える七言律詩の註に「名古屋に住むこと年有り」と記していることから、明治十二年秋、まず長崎に来航、恐らくはおそくとも翌十三年夏には名古屋に移り、そこから各地に遊んで、至るところ素封家や漢学者から厚遇を受けたものと考えられる。野村藤陰（一八二七―九九）の「藤陰遺稿」[17]巻二に収める、明治十四年の作と推定される七言律詩「江馬氏別荘小集、晤二清客胡鉄梅一、席上賦二七律一章一、以似」[18]は、胡鉄梅を囲む雅集を伝える一つの例である。

胡鉄梅の日本での制作は、管見の限りでは、丙戌（明治十九年、一八八六）三月の十六羅漢図（図版Ⅸ）を最後とすること、後に挙げる永井禾原の明治三十一、二年の作と推定される詩に「十年久慕雲霞友」とあること、などから、帰国は明治十九年三月を遠く隔てない時期と考えられる。上海に帰った胡鉄梅は、光緒二十二年夏、[19]租界で夫人生駒悦（日本人）の名儀で「蘇報」を創刊、その経営に当るかたわら、古香室牋扇店を営んだ。古香室は上海に遊ぶ邦人を主な顧客としたものであろう。

その晩年について、先に引いた「中文大辞典」は光緒二十五年（一八九九）、日本に客死」と記し、古賀十二郎氏稿本は、康有為の改革運動「戊戌変法」に関わり、日本に亡命した、と伝える。戊戌変法は光緒二十四年（一八九八）六月十一日に始まり、同年九月二十一日に終っていること、蘇報の経営が胡鉄梅から陳範に移ったのはやはり光緒二十四年のことであるから、日本亡命は同年九月末からくれにかけてのことと考えられる。翌明治三十二年（一八九九）、神戸で病没、追谷墓地に葬られた。墓碑は今も神戸市中央区追谷墓地十六区にある。碑は上部がゆるやかな弧をなす高一〇八糎、横五十九・四糎、幅三十八糎の御影石に、かつて交遊のあった心泉（金沢の人と聞く）なる僧の書で

（表）清江南名士胡鉄梅先生墓
　　辱知心泉迂衲謹書
（裏）明治卅二年十一季建

と刻されているだけで、生没の年月日を詳かにしない。また胡鉄梅墓の左前方、墓園の通路となっているところに墓域からはみ出たようなかたちで夫人の墓石がある。表面には胡鉄梅の書で

生於明治元年八月十八日
卒於三十二年四月十五日
於戲有和女士上海蘇報館主生駒悦君之墓
杖期生堯城胡鉄梅抆涙拝題

と刻されている。墓守の老女は、昭和九年の室戸台風のときにどこからか押出されたままと伝えるが、現在の墓地の状態から推測してもとは胡鉄梅墓の右横にあったものと考えられる。

上海に帰ってからの胡鉄梅についてはほとんど知るところがない。わずかに明治三十年（一八九七）夏から三十三年（一九〇〇）春まで日本郵船会社上海支店長として上海にあった永井久一郎（一八五一―一九一三）と交遊のあったことが、その「西遊詩続稿」[20]巻一に収める「胡君鉄梅招飲席間賦詩」によって知られる。

戴筆曾遊楊柳城（曾至日本住名古屋有年）　海東
万里擅才名　十年久慕雲霞友　今
日又尋詩酒盟　問世新文欽志気
（設蘇報館）　照人青眼見交情　知君別有
通神手　静夜壁間聴水声（雅善絵画名遍中外）

かつて日本で画名の高かった胡鉄梅を、上海に遊んだ折に訪れる邦人は少くなかったことと考えられるが、そのような交遊の跡は他にはほとんど伝わらないようである。また、帰国以後、晩年までの制作と確認できる作品は見当らない。恐らく画筆を執ることは少かったものであろう。

現在知られる胡鉄梅の作品は山水から花卉、翎毛、人物にわたり、画風にもかなり変化がある。今、図証を省くが、花下双狗図の犬の表現には、西洋画に学んだ新しい印象風な画法が認められる。また、山水画も画史の伝える「多く渇筆を用い」て清淡な画趣を湛えるものから、やや濃墨を多く用いた濃潤な作品まで多様なものがあることは、彼の画技がすぐれていたことをうかがわせる。溪亭観瀑図（挿図2）の巻首の枯樹に見る鋭い筆致は彼の筆力の強さをよく示しているし、淡墨と中墨とを重ねた岩の筆法、画面の経営も巧みである。胡鉄梅の山水画の代表作の一つとみてよかろう。十六羅漢図（図版Ⅸ）は数少い彼の人物画の一例であるだけでなく、彼の代表作とするに足る作品である。背景の山と羅漢の走り、集まる斜面をくの字型に連続させた構図に深い意想がうかがわれる。また、十六人の羅漢を表情と動作とによって描き分けた筆力は、彼の技量の深さを示している。羅漢の僧衣に淡い青、紫、橙、代赭などを用いるほかは、土坡の淡墨にところどころ、僅かに淡い代赭と青とを刷くだけの清雅な作柄である。題款は

瀟灑竜眠不可呼　采毫猶喜未模糊
天台五百知何処　還向図中証有無
光緒十二年歳在丙戌三月為
聴潮軒主人雅属並正　清国胡鉄梅写於山陰　白文「胡銕梅」　白文「堯城子」

関防は「安定」（朱文）、間章は「漱玉山房」（朱文）。

次に、手元の資料にみえる胡鉄梅作品を挙げておく。なお、彼の歩いた新潟から北陸、名古屋、山陰地方には、まだかなりの数の作品が現存していることと考えられる。

1 老梅図　「辛未孟春（一八七一）胡鉄梅画」　「吟香閣叢画」
2 寒林古寺図　「癸酉六月（一八七三）胡鉄梅揮汗写此」　富士美術館「近代中国の書と画」
3 花卉画冊　「乙亥十月（一八七五）胡鉄梅」　「支那南画大成続四巻」
4 松林蕭寺図　「乙亥仲冬（一八七五）新安胡鉄梅写」　「清朝書画譜」
5 臨流茅亭図　「光緒庚辰（一八八〇）冬十月中華胡鉄梅擬董宗伯筆意于日本之浪越」　橋本太乙コレクション
6 玉堂富貴図　林宗毅氏蔵

挿図2　胡鉄梅筆　渓亭観瀑図　東京　林宗毅氏蔵

「光緒壬午八月之秋中華胡鉄梅写　一八八二
于浪華長笛一声楼」　林宗毅氏蔵
7 山水図（附光緒九年許子野賛）
8 春江釣艇図　橋本太乙コレクション
「光緒十年春中華胡鉄梅」　一八八四
9 十六羅漢図　（図版Ⅸ）
「光緒十二年（略）於山陰」　一八八六
10 煙寺聞鐘図
「擬王廉州太守筆意於日本山城之
鴨涯中華胡鉄梅」
11 花下双狗図　林宗毅氏蔵
「伊藤雅君清属　胡鉄梅」
12 観瀑図（挿図2）　林宗毅氏蔵
13 蒼松老屋図　林宗毅氏蔵
14 山水図　林宗毅氏蔵
15 歳朝図　長崎市立博物館蔵
16 葡萄栗鼠図　橋本太乙コレクション
17 墨竹図　「胡鉄梅」　森岡家蔵
18 竹鳳図　「胡鉄梅」　林宗毅氏蔵
19 歳寒二友図　「胡鉄梅写意」
20 山水図扇面　「胡鉄梅」　姜河亀氏蔵
21 松鶴図　姜河亀氏蔵
「清国胡鉄梅写於倉子城中」
22 老松之図　姜河亀氏蔵
23 老松草花図　姜河亀氏蔵
24 秋林曳杖図　「吟香閣叢画」
25 青蕉紫微図　「聴雨楼書画録」
26 設色霊照女併題　「聴雨楼書画録」
27 四時花鳥図　「南宗画志七」
28 梅花寒雀図　「聴雨堂書画図録」
29 勁翮凌風図　「澳門賈梅士博物院国画目録」

なお、胡鉄梅墓碑の調査に当っては岸本晃一氏のご協力を得ました。御礼申上げます。

註

（1）芸術賞鑑選珍続輯本、民国六十年台北漢華文化事業股份有限公司影印。
（2）民国十七年刊。
（3）一九六一年香港商務印書館刊「嶺南画徴略」附。
（4）民国二十四年北平豹文斎刊。
（5）「中国美術家人名辞典」一九八一年上海人民美術出版社刊。
（6）一九七三年香港博物美術館刊。また一九七七年香港大学亜洲研究中心刊「亜洲研究中心書目索引第十一・澳門賈梅士博物院国画目録」にも所収。
（7）明治十三年東京茉莉詩店刊。　清人羅雪谷来過、賦此以贈、雪谷善指頭画
従来妙処在天然　物象何論媸与妍　借個雲烟供養去　人間一種指頭禅
（8）さねとう・けいしゅう編訳「大河内文書―明治日中文化人の交遊」（東洋文庫18・昭和三十九年平凡社刊）五十一ページ、また百五十九ページ。
（9）徐珂撰、民国六年上海商務印書館刊民国五十五年台湾商務印書館影印。
（10）民国九年上海楊氏刊。
（11）民国五十七年台北中国文化学院刊。
（12）郭味蕖編、一九五八年北京人民美術出版社刊。
（13）長崎県立長崎図書館古賀文庫蔵。
（14）同　右
（15）「滬遊雑詩」巻下、胡鉄梅大幅画成喜而賦
山水画成青緑図　幾経拈筆費臨摸　人間漸漸如真鼎　今日休言巨眼無
（16）明治十八年刊。　明治十六年五月十七日条
十七、晴、発水原―略―所謂五泉平是也、宿戸長吉田久平家、―略―聞清人胡鉄梅来客於此土、往訪其寓、忽々相唱和。
（17）全三巻、平野豊次郎編、明治四十一年刊。
（18）略従図画知超俗　相見更欣徳量寛　筆換舌未劣通意　詩抒臆去互嬋歓
萍逢蓬合因縁在　雨散雲揺再会難　為我一揮遺尺幅　毎思君処展来看
（19）張静廬輯「中国近代出版史料初編」一九五三年上海上海出版社。
（20）庚子（一九〇〇）上海刊。

（一九八三・四）